

平成30年度 活動報告書

「健口美[®]」レポート 2018

公益財団法人 ライオン 歯科衛生研究所



◆ご挨拶

公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所
理事長 藤重 貞慶



私どもの口腔保健普及活動は、口腔衛生への関心を高めることを目的に1913年に開催した「ライオン講演会」を原点としています。また、1921年には日本で最初となる児童専門の歯科医院「ライオン児童歯科院」を開設しました。この2つの活動が当財団の前身となっています。2010年10月からは「公益財団法人ライオン歯科衛生研究所」となり、口腔保健の普及啓発を図り、心身の健康と福祉に寄与することを目指し、さまざまな活動を展開しております。

さて、平成元年の1989年に厚生省（現・厚生労働省）と日本歯科医師会でスタートした「8020運動」は2018年に30周年を迎え、国民運動として定着してきました。80歳で20本以上の歯を保っている「8020達成者」は1993年（H5）歯科疾患実態調査では約10%であったものが2016年（H28）調査では50%を超えるまでになり、国民の歯と口の健康への関心の高まりの一端が示されています。また、2018年6月に閣議決定された「骨太の方針2018」には、生涯を通じた歯科健診の充実が明記されています。このように、歯や

口の健康は、生活の中で大切な機能を担っており、その重要性はますます増してきています。

8020運動や国の諸施策は、生活の質（QOL）の向上と健康寿命の延伸、人生100年時代の実現をめざし、歯科口腔保健に関するさまざまな活動を行っている当財団の事業の方向性と極めてよく合致しているものと考えております。

この度、当財団の活動をより多くの方々にご覧いただくことを目的に年次報告書「健口美レポート2018」を作成いたしました。ご覧いただければ幸甚に存じます。

これからも、人々が健康で幸せな毎日を、満ち足りた人生を過ごせるよう口腔保健に関するさまざまな事業に取り組んでまいります。今後とも、当財団へのご理解とご指導ご鞭撻を賜りたくよろしくお願ひ申し上げます。

◆「健口美」に込めた想い



（公財）ライオン歯科衛生研究所では、「食べる」、「話す」、「笑う」など、生活するうえで大切な役割を果たす口腔に対して、人々のケア意識のさらなる向上を目指し、「健康な心と身体はお口から！「健口美」のコンセプトのもと、生活者の生活の質（QOL）の向上につながるよう支援を行っています。

Oral Health（口腔の健康）、Oral Beauty（口腔の美しさ）、Communication（コミュニケーション）の三つの要素が機能し、かつ調和していることからもたらされるもの、それが「健口美」です。三つの要素を保持・増進することで、口腔だけでなく身体の健康および心の健康、その結果として生活の質（QOL）の向上に繋がると私たちは考えます。「健口美」には健康なお口の「健」、良好なコミュニケーションを行う「口」、美しいお口の「美」という意味が込められています。

財団の概要

「お口の健康」を通じて、生活の質の向上に努めます

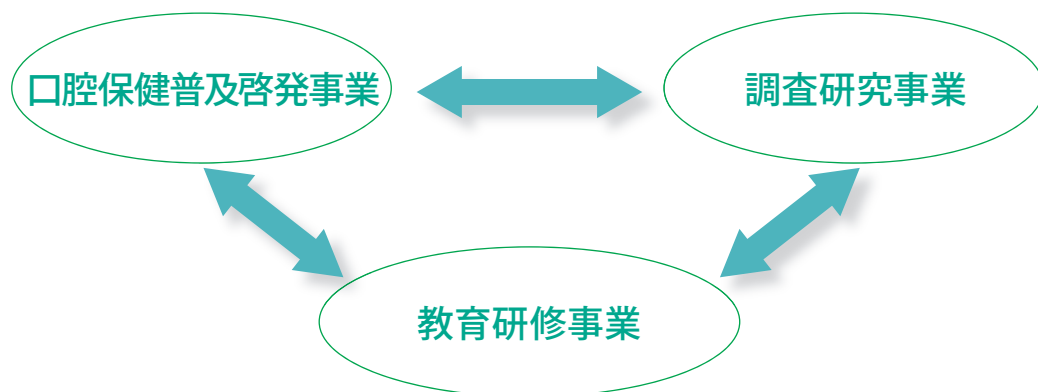
ライオンは「企業活動で得た利益を社会に還元する」という創業以来の一貫した理念のもとに、1913年から口腔保健の普及・啓発活動を行ってきました。当財団はその前身としての「ライオン児童歯科院」を1921年に開設、その後1964年に財団法人ライオン歯科衛生研究所として発足、2010年には公益財団法人ライオン歯科衛生研究所として「口腔保健普及啓発事業」、「調査研究事業」、「教育研修事業」の3つの事業を推進しています。

財団の3つの公益事業

- 1 口腔保健普及啓発事業 > 乳幼児から高齢者まで、それぞれのライフステージにおける口腔保健のテーマに応じた普及啓発を推進しています。
- 2 調査研究事業 > 口腔保健普及啓発事業や予防歯科研究活動を通して得られた研究成果を専門家や生活者に情報発信しています。
- 3 教育研修事業 > 保健指導者や歯科専門家に対する各種セミナーや講演会を実施しています。

当財団では、これら3つの事業を通して、生活者の口腔の健康の保持・増進し、生活の質の向上に貢献できるよう努力を続けています。

(公財)ライオン歯科衛生研究所の活動



3つの事業を通して得られる知識やノウハウ

口腔の健康の保持・増進を通して、生活の質(QOL)の向上に貢献しています。

調査研究活動を通じた財団の取り組み

◆ 認知機能低下抑制に関する研究成果とこれからの超高齢社会に向けて

急速に高齢化が進んでいる日本では、認知機能の低下予防や症状の回復は重要な課題となっています。公益財団法人ライオン歯科衛生研究所では高齢者の介護予防を目指した口腔機能管理プログラムを開発してきました。そこで、このプログラムが認知機能の低下抑制に役立つかを明らかにするため、沖縄県宮古島市で軽度の認知障害の方を含む高齢者に対して5ヶ月間介入研究を行いました。その結果、有効性が示され、これらの成果が“Asian J Gerontol Geriatr 2018; 13: 19-24”に論文掲載されました¹⁾。

今回、共同研究者として参加、ご指導いただいた高橋龍太郎先生（多摩平の森の病院 院長）に研究の成果やこれからの認知機能低下予防、超高齢社会などについてお話をうかがいました。

本研究の難しさと成果

今回研究を行った沖縄県宮古島市は、歴史的・文化的な背景から、同一地域の中での交流は非常に密接である一方、他の地域との交流は希薄という地域特性がありました。通常の介入研究では「介入群／対照群」をランダムに割り付けるランダム化比較試験（RCT）を行うのですが、宮古島では個人ごとのランダム化の方法は採用せず、地区ごとに介入群と対象群を割り付けました。通常のRCTではありませんでしたが、「介入群で口腔機能の向上、認知機能の予防に効果があった」という成果が得られ論文掲載に結びつきました。

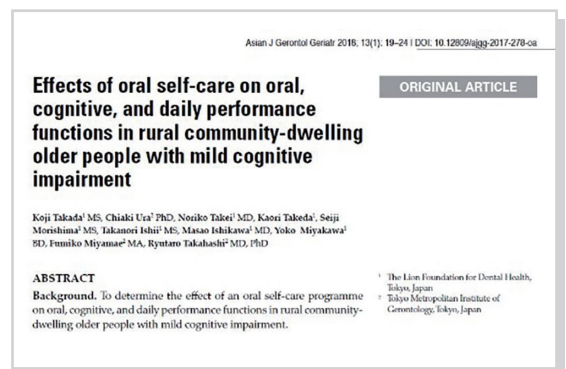
現在、介護予防を含め、様々な取り組みを自治体ごとに実施していますが、理想的な「介入群／対照群」のように分けられないのが実情です。今回、宮古島で実施した「地域集団ごとに割り付けて実施するプログラム」は、自治体で行うプログラムの評価に応用できる方法として報告ができたこともよかったです。

今回の論文は、強力なエビデンスとまでは言い難いため、他の地域でも当財団で検討してエビデンスを積み重ねていただきたいと思います。

口腔への関心を高めることの重要性

医学的な視点から、歯を含め口腔機能への関心を高めていくことが、今後更に必要だと考えています。肺炎予防に限らず、美味しく食べる、飲み込みをスムーズにするなど、より良いレベルで口腔の健康を保つことは日々の生活の基礎になるからです。

今回の結果から、要介護状態にある「自分で行うことができにくくなっている人」にとって、ごく基本的な行動を工夫して少しでもできるようにすることがとても重要だと考えています。おろそかになりやすい口腔のケア、身体をきれいに保つことなど、当たり前のことをきちんと提供することは、人間の基本的な機能の維持には重要だと考えられます。今回の宮古島のように高齢者が多く、認知機能が衰えている人に対して、当たり前のことを支えてあげることで、ずいぶん認知機能の衰え方が違ってくるような印象を持っています。



沖縄県宮古島市での研究について
“Asian J Gerontol Geriatr 2018; 13: 19-24”に掲載された論文



高齢者の介護予防を目的とした口腔機能向上プログラムについて、高齢者向けに説明を行う様子

1) Takada K, Ura C, Takei N, Takeda K, Morishima S, Ishii T, Ishikawa M, Miyakawa Y, Miyamae F, Takahashi R. Effects of oral self-care on oral, cognitive, and daily performance functions in rural community-dwelling older people with mild cognitive impairment

認知症が当たり前の時代になってくる

現在の日本は高齢者の更なる高齢化が進んでいる国です。2040年頃には高齢者の人口も平衡状態になり、その後人口の減少に伴い高齢者人口も少なくなってくると認知症が減少してくる可能性もあります。一方、医学の発達とともに認知症を減少させる可能性はあるものの、長寿国である限り90歳、100歳になる人が増え、これらの人の認知症は避けがたいのです。

現在のように、認知症になるのではないかと不安をかき立てる状況ではなく、「当たり前の病気」となって「こういうことをしたらよい」などの方法や「サービス」を定着させ、多くの認知症の人がそれなりの生活ができる「経験値」を増やしていくことが大切ではないかと考えています。日本は他の国に比べ施策、専門職の協力の仕方、取り組み、仕組み作りの点で様々な工夫がされているので対応できる社会に向かうことができると考えています。

社会とのつながりを保つことの大切さ

今回の宮古島に限らず、男性はなかなか地域社会の交流に参加していない状況にあります。我が国では、会社をリタイヤした後に次のライフサイクルへと移行できない人が多いことが課題となっています。認知症の予防で特に重要なことは、「地域社会との接点」を持ち続けることにあります。地域社会との接点がなくなってしまうと「認知症はそこまで来ている」と考えた方がよく、「社会との交流へのこだわり」を捨ててしまった人は危険な状態にあるといえます。社会とのつながりを保ち続けられるシステム作りもこれからの重要な課題と考えています。



高齢者のかむ力の検査を色変わりガムを使って行っている様子



口の周りの機能の維持向上もかねて皆で早口言葉の練習を行う高齢者の様子



高橋 龍太郎先生

医療法人社団 充会 多摩平の森の病院 院長

仙台市生まれ
 京都大学医学部卒
 東京都老人医療センター(現東京都健康長寿医療センター)
 岩手県沢内村立病院
 宮城県鶯沢町立医院
 東京都老人総合研究所(東京都健康長寿医療センター研究所)
 を経て現職

口腔保健普及啓発活動

母子歯科保健活動

2018年度参加乳幼児・園児 2,081人

累計:115万人

妊婦・乳幼児とその家族が集まるイベントでの普及啓発活動

当財団の母子歯科保健活動は、乳幼児のむし歯を予防していくには、保護者のむし歯予防への理解と関心を高めることが大切であるとの考えから、1959年から始まり「たんぼ運動」の愛称で親まれてきました。現在は地域行政や歯科医師会などと連携し、妊婦や乳幼児、園児とその保護者を対象に活動を行っています。

2018年度の主な活動としては、4月にパシフィコ横浜にて開催された日本マタニティフィットネス協会主催の「マタニティ&ベビーフェスタ2018」、6月に大阪南港ATCホールにて開催されたマタニティカーニバル実行委員会等主催の「マタニティカーニバル2018」にてミニセミナーを行い、計4日間で322組が参加しました。

妊婦を対象としたミニセミナーでは、妊婦自身のオーラルケアについて、乳幼児とその保護者を対象としたミニセミナーでは歯みがきはじめる時期や仕上げみがきの実習を行い、赤ちゃんも家族も楽しく歯みがきができる工夫などを紹介しました。また、むし歯は生活習慣病でもあるため、間食の摂り方など歯みがき以外の視点からの情報提供も行いました。

今後も家庭が一体となって予防歯科実践につなげられるよう、活動を行ってまいります。



妊婦向けにオーラルケアの講演会を行う様子

小学生歯科保健活動

2018年度歯みがき大会参加児童数 約21万人

歯みがき大会累計:約145万人

第75回全国小学生歯みがき大会を開催、約21万人が参加

全国小学生歯みがき大会は、小学生の歯と口に対する健康意識を育むことを目的に、毎年「歯と口の健康習慣(6月4日～10日)」に合わせて開催しています。第1回大会から第75回大会までに参加した児童数は、約145万人に及びます。

第75回大会は、大会期間内(6月1日～10日)に参加校が実施日を設定し、DVD教材を視聴する方式へ変更した2回目の開催となり、全国47都道府県及びアジア6カ国地域の小学校から総数3824校、約21万人の小学生が参加しました。大会では「歯と自分をみがこう」をテーマとして、明海大学学長の安井利一先生監修の下、「歯ぐき」を題材に、お口の状況に合わせた歯のみがき方やデンタルフロスの実習、歯みがきを通して「継続する力」の大切さを学びました。さらに、本大会では小学生の時期から歯みがきを含む生活習慣を身につけることが、将来の健康の大きな財産になることから、食習慣や規則正しい生活習慣の重要性も伝えました。

今後も多くの小学生にオーラルケアの習慣化や続けることの大切さを伝えるため、内容の充実を図りながら、活動を続けてまいります。



第75回全国小学生歯みがき大会に参加する児童の様子

学校歯科保健指導者対象の研修会を実施し健康教育の充実を支援

子どもたちへの口腔保健活動は、正しい歯みがき習慣を身に付けさせ、子どもたちをむし歯から守ることを目的に、1913年に開催された『ライオン講演会』が始まりです。その後、子どもたちへ正しい歯みがき方法を習得させるため、歯みがき実習を取り入れた『歯磨教練』の普及を支援し、全国の小学校で展開してきました。現在は、養護教諭をはじめとする保健指導者へ向け、健康教育の際に活用できる教材提供や情報発信をすることで、より多くの小学生が歯と口の健康の大切さを学べるよう支援を行っています。

2018年度は、全国5ヶ所の学校歯科保健指導者を対象とした研修会で、当財団がホームページで公開している小学生歯みがき研究サイト『歯みがKids』を活用して、保健指導者が児童に健康教育を行う際の指導要項をつくりあげていくワークショップを開催し、保健指導者を介して小学生が望ましい健康行動をとることができるようになるための支援を行いました。

これからも、保健指導者を通じ、小学生の歯と口の健康づくりに貢献できるよう活動してまいります。



指導要項を作成するワークショップにて、参加者が作成した内容を発表する様子

口腔保健普及啓発活動

◆ 思春期歯科保健活動

2018年度参加者数 2,753人

「第38回全国高等学校クイズ選手権」でデンタルフロスの大切さを啓発

当財団の思春期歯科保健活動は、生活習慣などの乱れが多くなり、むし歯や歯周病が発生・悪化しやすい思春期の生徒に、健康への関心を高め、生活習慣の課題を発見し解決できるように動機付けすることが大切との考えから始まりました。近年、小学生のむし歯は年々減ってきましたが、中学生以降になると、口腔内の状況が悪化してしまう傾向にあります。小学生のときに培ってきた規則正しい生活習慣を中学・高校になっても続けられるように支援したいと考え活動を行っています。

2018年度の主な活動として、「第38回全国高等学校クイズ選手権」の関東会場と近畿会場で、参加した高校生にデンタルフロスの体験を行うブースを設置し、約400人に啓発を行いました。参加した生徒からは「歯ブラシだけでは歯と歯の間が6割しかきれいににならないのはビックリした」、「デンタルフロスを使うととてもスッキリするのでこれからも使いたい」といった声がきかれ、多くの高校生に関心を持ってもらうことができました。

これからも、思春期の生徒に合わせた情報発信を行い、歯と口の健康から生涯にわたる健康習慣が確立できるよう支援していきたいと考えています。



高校生に対してデンタルフロスの啓発を行う様子

◆ 成人歯科保健活動

2018年度参加者数 14,316人

累計:210万人

企業向け健診・講演会の実施

当財団の成人歯科保健活動(産業歯科保健活動)は、家族の歯と口の健康を守るためには、特に女性を中心に指導を行うことが重要との考えから、1961年に「さくらんぼ活動」の愛称で開始されました。現在は就業者を対象に歯科健診、歯科保健指導、講演会などを実施しています。2018年度は年間85事業所、約1万8千人の就業者を対象に実施し、1961年開始から延べ約210万人に活動を行ってきました。

働き盛りの成人期に、自分の歯と口の健康状態を理解し、予防意識を高めることは健康寿命の延伸や生涯にわたる生活の質の向上に大きく影響してきます。継続して歯科保健活動を行うことは、就業者の予防歯科意識を高め、歯科疾患の減少、さらには歯科医療費の削減などにも繋がっていくことが期待できます。

これからも、歯と口の健康を通じて全身の健康を見据えた予防意識の向上、および健康行動への変容を目指し、より質の高い歯科保健活動を行ってまいります。



成人の方を対象に講演会を行う様子

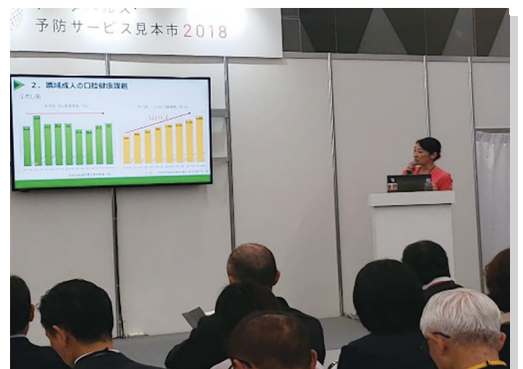
データヘルス・予防サービス見本市にてセミナーを出展

成人期における、口腔の健康の大切さを広く啓発するため、「データヘルス・予防サービス見本市」でセミナー出展を行いました。

データヘルス・予防サービス見本市は、平成30年度「厚生労働省 予防・健康インセンティブ推進事業」で、個人の健康づくりに対する取り組みを医療保険者、企業、地方自治体の関係者の中で広げていくことが目的であり、先進事例の紹介や関係者間での問題意識の共有をする機会となります。

セミナーでは、成人期における口腔の健康課題や当財団の取り組みの紹介を行いました。見本市での歯科分野の参加は当財団が初めてということで、聴講席50名のところ立ち見を含め約100名の方に参加いただき、関心の高さが伺えました。また、色々な業種が集る見本市に参加したことで口腔の健康に関心の少なかった医療保険者、企業、地方自治体に対しても口腔の健康の重要性を伝える良い機会となりました。

今後もさまざまな場面で成人期における、口腔健康の大切さを啓発してまいります。



「データヘルス・予防見本市」でセミナーを行う様子

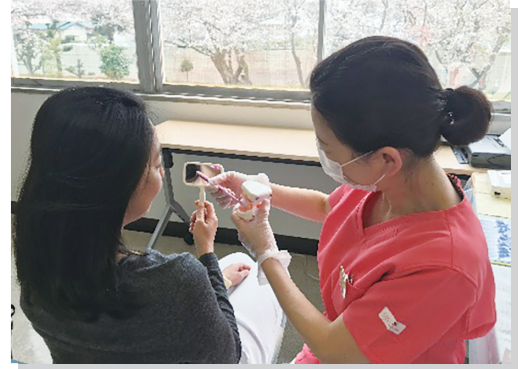
口腔保健普及啓発活動

企業従業員の健康保持増進のための歯科保健プログラムの推進

当財団ではライオン株式会社、ライオン健康保険組合と共に、従業員が自ら歯と口の健康に関する予防意識を高め、健康の保持増進に結び付けられるよう、全従業員を対象に定期健康診断とあわせて歯科健診や保健指導を行っています。(All Lion Oral Health Activity (ALOHA))。

ALOHA活動は2002年度から始まり、第5期(2016年度～2018年度)の最終年度となる2018年度は、唾液検査システム(SMT)を使用したお口の健康状態の確認、口腔内カメラを活用した保健指導、さらにeラーニングシステム(L-navi)を用いた健康情報の提供を行っています。その結果、2002年度から2018年度にかけて重度歯周病疾患罹患者の減少(11.5%→6.3%)、および歯科医院での定期的なプロケア受診率の増加(10.2%→44.3%)など改善が認められています。

これからも従業員のオーラルケアへの意識の向上と好ましい健康習慣に結びつけられるよう活動してまいります。



企業従業員に対して保健指導を行う様子

高齢者歯科保健活動

2018年度参加者数 47,012人

累計:12万人(2007年より)

「健口美」体操による啓発活動

生涯にわたり、「食べる」、「話す」、「笑う」など大切な役割を担う、口の機能(口腔機能)は、気付かないうちに年々低下しやすいため、日ごろから保持・増進していくことが大切です。当財団では、口腔機能の保持・増進に繋がるよう手軽に行える「健口美」体操を作成し、生活者の皆様へ情報発信を行っています。

2018年度は、全国のウォーキングイベント会場のステージなどで「健口美」体操の実演や、高齢者向けの講演を行い、啓発いたしました。また、会場のブースでは自身の口腔機能の確認に繋がるお口の元気度チェックや個別のアドバイスを行い、約650名の方が参加しました。お口の口腔機能のチェックでは、自分のお口の状態を把握してもらい、低下している機能に合わせた「健口美」体操を紹介しました。

今後も、生涯にわたり、おいしく食べ、楽しく話し、笑いのある生き生きとした生活に繋がるよう、「健口美」体操の普及啓発活動を行ってまいります。



生活者に対して、お口のお悩みに合わせた健口美体操を紹介する様子

全国健康福祉祭「ねんりんピック」にて口腔機能の重要性を紹介

当財団では、口腔機能の重要性について啓発を行うことを目的に2016年から「ねんりんピック」の愛称で親しまれている60歳以上を対象とした全国健康福祉祭で「健口美」体操の啓発活動を行っています。この「ねんりんピック」には、全国から競技者が参加し、2018年11月に富山県で開催された「ねんりんピック富山大会」には、約55万人が参加しています。

当財団では、ねんりんピックの開催地である富山県の市民を対象に、ステージ上での「健口美」体操の実演を行い、市民の方々に口腔機能の大切さについて啓発を行いました。また、サッカー競技者を対象に、日ごろの歯と口についての悩みに答える「お口の健康相談」を行いました。

お口の相談室に参加された60歳以上の競技者の方々からは歯のみがき方や「健口美」体操の取り入れ方についてなど多くの質問が寄せられ、歯と口に対する関心の高さが伺えました。



ねんりんピック富山大会のステージで市民の方に向けて「健口美」体操啓発を行う様子

口腔保健普及啓発活動

ハンディキャップのある方への歯科保健活動

企業で働く障がいのある方への歯科保健活動

厚生労働省は民間企業、国、地方公共団体に障がい者の雇用を働きかけています。現状においては、『民間企業、国、地方公共団体は、「障害者の雇用の促進等の法律」に基づき、法定雇用率に相当する数以上の障害者を雇用しなければならないこと』とされています。

このような社会背景から民間企業に雇用されている障がいのある方は年々増加している状況にあります。当財団では、企業で働く障がいのある方に対しても歯科保健活動を定期的実施しています。2018年度は、29名に対して3回の「歯科講習会」を行いました。

講習会では歯の役割やむし歯のでき方などの知識、歯のみがき方、予防歯科の重要性について紹介しました。講習では、集中して取り組みやすいように、少人数グループで実施し、文字とイラスト・動画を組み合わせて分かりやすい資料作成を心がけています。これらの講習内容は、年1回の歯科健診と併せて口腔内状態や行動変容についても評価を行い、その結果を基に考案しています。



企業で働く障がい者に歯科講習会を行う様子

名古屋地区での取り組み

当財団では、障がいの有無にかかわらず「歯と口の健康」の支援を行うため、合理的配慮(障がいのある人が日常生活や社会生活を送る上で妨げとなる社会的障壁を取り除くために、状況に応じて行われる配慮のこと)に心がけた歯科保健活動を行っています。2018年度は東海地方を中心に特別支援学校5校、156名に対して「歯と口の健康教室」を行いました。

合理的配慮は様々あります。例えば、聾学校では聴覚障がい者の支援団体の監修を受けて、手話を用いた口の健康、歯のみがき方の説明などを行っています。また、病弱特別支援学校では、先生方の提案で、Skypeを活用した授業を行いました。教室の児童・生徒と隣接する病院にいる児童・生徒とをSkypeでつなぐことで、多くの児童・生徒と一緒に口の健康、歯のみがき方などを伝えることが出来ました。

どの活動においても、特別支援学校の先生方や、障がい者支援団体の方など、多職種と連携して行っています。

今後も障がい者の方々に対する口腔保健普及啓発活動を進めてまいります。



模型を使って歯のみがき方の説明を行う様子

スポーツの場面における歯科保健活動

卓球強化選手に向けた歯科保健活動

日本卓球協会の園児・小学生強化選手を対象に、オーラルケアも生活習慣の1つとして定着させ、主体的な健康行動に繋げ、向上させることを目的に男女各4回、約130名に歯科講話を実施しました。

日々の栄養摂取やトレーニングを行うことと同じように、生活習慣の1つとして、毎日オーラルケアを習慣化することで、「継続する力」を身につけることや自分に合った歯みがき方法、オーラルケア用具を選んで使うことによる「工夫する力」を身につける大切さを示しながら、オーラルケアとスポーツの重要性を伝えました。また、小学生の時期は他律から自律への移行期であり、保護者の関わりも重要であることから、保護者・指導者約50名に向けても歯科講話を行いました。オーラルケアを習慣化し、継続して行うことで、からだの健康やスポーツのパフォーマンス、さらには夢の実現にも繋がるということを伝えました。遠征などで親元を離れる機会も多いことから、保護者にオーラルケア意識の向上や予防歯科の重要性を理解いただき、選手の良い生活習慣に繋げ、オーラルケアの啓発を通じて小学生の夢の実現を支援してまいります。



卓球強化選手に対してオーラルケアの重要性について啓発を行う様子

口腔保健普及啓発活動

海外での取り組み

台湾 歯みがき大会及び歯科保健指導の実施

第75回全国小学生歯みがき大会は、日本全国47都道府県とアジア6ヶ国・地域の小学校から参加がありました。台湾では6月27～28日に日本人学校2校(台中日本人学校・高雄日本人学校)が参加され、合計125人の児童が参加しました。高学年には全国小学生歯みがき大会の支援、低学年には歯科保健指導を実施しました。歯みがき大会では、自分の歯肉観察やデンタルフロスの実習の際に歯科衛生士が小学生の間に入り指導を行い、個別サポートを実施しました。低学年への指導では、歯の働きや生え変わり、むし歯の原因などを学習し、歯みがき実習も行いました。

また、同期間に現地校3校(高雄福東国小・高雄中正国小・台北天母国小)473人の高学年を対象に歯科保健指導も行いました。むし歯と歯肉炎の成り立ち、歯肉が出すサイン、歯肉観察や上手な歯みがき方法についてクイズや実習を交えながら指導を行いました。

今回の活動が台湾の小学生のよりよい歯みがき習慣の定着につながればと考えています。これからも国内に限らず海外でも支援活動を推進し、歯みがき大会においては日本人学校に加えて現地校での参加拡大も図りながら、それぞれの各国の歯と口の健康の向上に貢献していきます。

ホーチミンでの取り組み

2019年2月の4日間、ベトナムのホーチミン市幼稚園児、小学生を対象とした歯みがき教室を現地の幼稚園、小学校で開催し約4,600人が参加しました。今回のイベントでは、現地新聞社のトイチェ新聞が主催、毎日新聞が共催、ライオン株式会社協賛で行われ、ライオン株式会社からの依頼により当財団が講演を行いました。

ベトナムでは小児のむし歯の放置や、多数歯のむし歯の保有が問題となっているため、歯のみがき方・おやつのかぶり方・乳歯のむし歯についてクイズなどを交えた内容で啓発を行いました。

また、現地の生活者に向けて口腔保健の啓発を目的に、ショッピングセンターで歯みがき相談室も行いました。口腔内カメラを用いて気になる部分を確認し、口腔内の状況にあった歯みがきなどの保健指導を約500人に行いました。

それぞれの国の環境や考え方によって口腔内の状況や口腔衛生への取り組みには大きく違いがあります。日本での長年にわたる口腔保健普及啓発活動の取り組みを活かしながらそれぞれの国の状況や環境に応じた啓発を実施し、歯と口の健康向上に貢献していきたいと考えています。



台湾の現地校での歯科保健指導で、上手な歯みがき方法を伝える様子



ベトナムのホーチミン市にて生活者に歯みがき相談室を行う様子

情報発信活動

ホームページなどを用いた情報発信活動を推進

当財団では、口腔保健普及啓発活動や調査研究活動などから得られた成果について、歯科専門家や保健指導者、生活者に向けて口腔保健関連情報を様々な媒体を通じて情報発信しています。

2018年度は、新たに妊婦～乳幼児の子どもを持つ保護者の方に向けて育児や歯と口に関する情報を発信するサイト『ママ、あのね。』を公開し、年間約40万人の方から閲覧がありました。

また、2017年に当財団が編者として発行した書籍『歯みがき100年物語』をもとに、口腔衛生思想の普及に取り組んだ企業と人にスポットを当て、100年にわたる地道な歯みがき普及活動について紹介するサイト『歯みがき100年物語』も公開しました。

今後も、ホームページや書籍など様々な媒体を通じて多くの人々に口腔保健の啓発に通じる情報発信を実施していきたいと考えています。



乳歯と育児の情報サイト『ママ、あのね』

調査研究活動の推進

東京デンタルクリニック

2018年度患者数 10,482名

累計:185万人

東京デンタルクリニックは、1921年(大正10年)に東京・銀座に開設された日本初の小児歯科専門の歯科医院である「ライオン児童歯科院」に始まります。1971年以降、目黒での診療所を経て2014年に五反田駅前に新たに開設されました。現在は、乳幼児から高齢者まですべてのライフステージの方々に対して予防歯科活動、診療活動を行っています。

障がい者歯科外来

かかりつけ強化型歯科診療所として地域の包括的ケアを目指す当院は、バリアフリー設計となっており、身体障がい者の方も来院しやすい環境です。さらに、2017年4月からは日本障害者歯科学会の専門医による障がい者歯科を開設し、知的障害・精神障害などの特別な配慮を必要とする方へも適切なお口のケアや治療を提供できる体制となりました。

現在は、絵カードを用いた歯科保健指導や、笑気吸入鎮静法を用いた治療など、疾患特性や発達に合わせた診療をご本人やご家族との相互理解のもとに行っています。

今後も、質の高い医療の提供とともに、地域の医療機関や2次医療機関と連携することで、地域の方のお口を通した全身健康に貢献したいと考えています。



治療や保健指導の内容が分かりやすいよう絵カードを用いた説明を行う様子

東京デンタルクリニックにおける保育園での取り組みについて

東京デンタルクリニックでは2017年から、近隣の保育園のかかりつけ歯科医として、地域の子どもの歯・口腔の健康保持増進に努めています。むし歯をはじめとする歯科疾患の予防を目的に、年2回の定期健診と年1回の保健指導を行っています。定期健診は0～5歳を対象に、むし歯の有無など口腔内の診査を行います。保健指導では2～5歳の園児を対象に、年齢に応じて、おやつを取り方やうがい・歯みがきの正しい方法を指導しています。ぬいぐるみやプロジェクターを用いながら、園児が楽しく学べるように工夫して指導を行いました。また、仕上げみがきの方法やフッ素について記載した「歯みがきだより」を保護者に配布し、家庭でもしっかり実践できるように、専門家として、園内の看護師に指導・助言しています。保育園内で起きた口腔領域における偶発的な事故にも応急的に対応できるようにしています。

これからも地域に密着した歯科診療所として、社会に貢献できるよう努めてまいります。



東京デンタルクリニックでは小児から高齢者まで幅広い年齢層の方々に対して予防歯科保健活動、診療活動を行っています。

東京デンタルクリニックでの歯科専門家向けセミナー活動

当財団では予防歯科の普及啓発活動の一環として、1984年から専門家向けのセミナーを開催し、診療での疑問点を解決出来るよう、少人数制で行っています。

「カリエスリスクセミナー」では、カリエスリスクを計測し、どのように予防歯科に繋げるかの定義・予防に効果的なフッ化物やシーラントの使用法・高齢化に伴い増加傾向にある歯根面むし歯の予防策など、財団が提唱するリスクコントロールデンティストリーを歯科医療従事者に普及し、予防歯科に繋げることを目的としています。

「歯周病管理セミナー」では、歯科衛生士を対象に歯周治療について症例を用いて理解を深め、歯周病の予防・処置方法を学ぶことを目的とする内容になっています。相互実習をすることで、臨床に繋がりの良い内容です。歯周病は若年層～壮年層が多いこともあり、日常生活で時間が限られている中、セルフケアを推進する指導法の需要も多く、今後の歯周治療では患者自身のセルフケアが重要であると感じています。

今後も臨床を基盤とし、予防歯科の啓発活動を歯科医療従事者に向け発信していく事により、より良い生活の質の向上に貢献できるよう活動してまいります。



歯周病管理セミナーの様子

調査研究活動の推進

弘前大学COIとの共同取り組み

(公益財団法人ライオン歯科衛生研究所/ライオン株式会社/弘前大学)

当財団は、2016年度より弘前大学で推進している「弘前大学COI(文部科学省の革新的イノベーション創出プログラム)」にライオン株式会社と共同で参画し、口腔保健の立場から研究事業と社会実装に取り組んでいます。

研究事業としては、弘前大学が青森県弘前市(岩木地区)で過去10年間以上実施してきた健康診断(岩木健康プロジェクト)により収集した膨大な健康情報のビッグデータを活用し、口腔保健と生活習慣病等の全身健康との関連性を解析しています。

2018年度は、口腔保健と全身健康に関わる要因の解明を目的として、食品・栄養摂取成分および生体内因子の相互作用について解析を行い、医科と歯科の学会で発表しました(日本公衆衛生学会1件、日本歯科保存学会1件)。

社会実装では、唾液検査と口腔内カメラを活用した啓発型歯科健診に参画しました。そこでは、健康リテラシーを高めることを目的に、結果判定に基づき即日啓発を行う受診者への健康教育を担当し、口腔保健行動の改善、定着化に貢献しました。



今の夢。十年後の常識。新しい未来をつくりたい。

日本歯科衛生学会 学術発表賞受賞 (公益財団法人ライオン歯科衛生研究所賞)の表彰

日本歯科衛生士会と日本歯科衛生学会は歯科衛生の向上と実践に根ざした学術研究において、優れた成績を上げ、人々の健康と福祉に寄与する研究発表に対して学術発表賞(公益財団法人ライオン歯科衛生研究所賞)を毎年授与しています。当財団はこれに協賛し、学術の向上を支援しています。2018年9月15日～17日に開催された日本歯科衛生学会第13回学術大会(福岡国際会議場)において、2018年度日本歯科衛生学術発表賞の表彰式が行われ、受賞した3名の方に当財団の山本副理事長から表彰式と副賞を授与しました。

第12回学術発表賞表彰者

【口演発表賞】

- 周術期患者における舌苔の付着状況と唾液中細菌数との関連の検討
船原まどか(兵庫県)
- 地域在住高齢者における咀嚼能力指標に関する実態調査
白部麻樹(東京都)
- ガム咀嚼周期の違いが認知機能および前頭前野の神経活動に及ぼす効果について
伊藤有花(千葉県)

(敬称略)



日本歯科衛生学会 学術発表賞受賞の様子
日本歯科衛生士会会長(左)
受賞者(中央)
当財団山本副理事長(右)

学術発表

口腔保健に関する調査研究を推進し健康の増進に役立つ最新情報の発信を行っています。本年度は歯科保健と全身健康および臨床症例などについて3件の論文投稿および7件の学会発表を行いました。

アンダーライン：財団所属

論文投稿

- ① 喜田奈々子、二川祐子、虎谷知美、武田香、石井孝典、眞木吉信：
リスク・コントロールに基づく歯科医療に関する研究 第2報 小児期と青少年期におけるカリエス・リスク・テストの有無と歯科保健行動および意識の比較
日本歯科衛生学会雑誌, 13 (1), 64-74, 2018 東京歯科大学衛生学講座
- ② 大江未久、武田香、河野有里、眞木吉信：東京都内の歯科診療所における3歳児の齲蝕有病状況 —1970年代から2010年代までの40年間の推移—
小児歯科学雑誌, 57 (1), 80-86, 2019 東京歯科大学衛生学講座

学会発表

- ① 後藤理絵、市橋透：歯科保健活動導入後10年間での口腔内状態の維持改善および医療費削減効果について
第91回産業衛生学会 (2018年5月16日～19日、熊本市)
- ② 森嶋清二、武田香、城隆太郎、山和馬、丸山真達、堤康太、石原央子、河野有里、眞木吉信：乳児期における口腔細菌叢の変化に及ぼす母乳の影響
第67回日本口腔衛生学会・総会 (2018年5月18～20日、札幌市)
- ③ 武田香、森嶋清二、河野有里、眞木吉信：唾液・歯垢検査に基づいたう蝕ハイリスク児へのアプローチに関する検討
第67回日本口腔衛生学会・総会 (2018年5月18～20日、札幌市)
- ④ 亀田麻未、二川祐子、白石奈々子、佐々木江美、鈴木基之、眞木吉信：舌清掃指導とSRPによって口臭の改善をみた一症例
第67回日本口腔衛生学会・総会 (2018年5月18日～20日、札幌市) 東京歯科大学衛生学講座
- ⑤ 森田十誉子、山崎洋治、佐竹杏奈、沢田かほり、小林恒、村下公一、中路重之：
地域高齢者における舌圧と体幹部筋肉量および血液中の分枝鎖アミノ酸の関連性
第77回日本公衆衛生学会 (2018年10月24日～26日、郡山市) 弘前大学大学院医学研究科
- ⑥ 伊土美南海、鈴木基之：ブラッシング方法の変更により改善が認められた1例 第61回秋季日本歯周病学会学術大会 (2018年10月26日～27日、大阪)
- ⑦ 森田十誉子、山崎洋治、佐竹杏奈、田村好弘、徳田糸代、小林恒、中路重之：地域高齢者における現在歯数および舌圧と食品栄養素摂取との関連性
第149回日本歯科保存学会 (2018年11月1日～2日、京都市) 弘前大学大学院医学研究科
- ⑧ 森岡俊介、貨泉朋香、黒川亜紀子、坂本真理子、古屋忠、山崎一男、山本秀樹：被虐待児の早期発見のための口腔内状況の実態調査
第3回日本子ども虐待防止歯科研究会学術大会 (2018年11月11日、広島市) (公財) 東京都歯科医師会
- ⑨ 渡邊祐介、野原佳織、貨泉朋香、黒川亜紀子、小林利彰、秋山一樹、藤崎健太郎、栗山茜、波多野優、藤田梨紗、韋琦、張琰雯、下村義弘：
唾液分泌量の定量化に関する研究
日本人間工学会 関東支部第48回大会 (2018年12月15日～16日、横浜市) 千葉大学工学部デザイン学科 千葉大学大学院工学研究院
- ⑩ 森田十誉子、山崎洋治、藤春知佳、川戸貴行、前野正夫：非肥満者における歯周病と心血管リスクとの関連性に関する横断研究
第67回日本口腔衛生学会・総会 (2018年5月18日～20日、札幌市) 日本大学歯学部

外部助成活用事業(科研費、厚労科研、AMED、8020助成など)

- ① 平野浩彦、武井典子：認知症の容態に応じた歯科診療等の口腔管理及び栄養マネジメントによる経口摂取支援に関する研究
日本医療研究開発機構 (AMED) 平成28年度～平成30年度 東京都健康長寿医療センター
- ② 川戸貴行、前野正夫、中井久美子、田中秀樹、森田十誉子：歯周病に着目した非肥満型メタボリックシンドローム予防に関する細胞生物学・疫学研究
科学研究費 基盤研究(C) 平成29年度～令和元年 日本大学歯学部
- ③ 中路重之、小林恒、森田十誉子、翠川辰行、内山千代子：
新たな歯科のスクリーニング手法の開発および歯科保健サービスが歯の健康づくりに与える影響等に関する研究
厚生労働科学研究(生活習慣病・難治性疾患克服総合研究事業) 平成29年度～平成30年度 弘前大学医学研究科、ライオン株式会社
- ④ 市橋透、後藤理絵、春山康夫、小橋元、武藤孝司：某健康保険組合のビッグデータを活用した医療費、健康状態、口腔内状態の関連性に関する研究
(公財) 8020推進財団 平成30年度8020研究事業 獨協医科大学医学部
- ⑤ 後藤理絵：職域成人における歯科口腔保健の普及啓発事業～健康保険組合における被保険者の現状把握と予防歯科の情報発信～
(公財) 8020推進財団 平成30年度歯科保健活動事業助成

図書・執筆

- ① 亀田麻未：明日から始める歯ブラシリサイクル デンタルハイジーンVol.38 No.8, P. 914 - 915, 医歯薬出版, 2018年8月
- ② 湯之上志保：第74回全国小学生歯みがき大会の報告 —参加率全国1位である岐阜県との比較—
日本学校歯科医会誌123号, 71-75, 日本学校歯科医会「広報誌」「会誌」編集受託 一世出版株式会社, 2018年
- ③ (公財) ライオン歯科衛生研究所(編集部取材)：
歯科保健指導の工夫 学年に合わせた歯科保健指導を目指して —歯みがKidsを活用した指導案の作成— 心とからだの健康, 20-28, 健学社, 2018年

理事・監事・評議員

平成30年6月20日現在

評議員 (任期：平成30年6月20日～令和4年定時評議員会終結時)

評議員 19名

	氏名	役職名	
評議員	朝田 芳信	鶴見大学 歯学部 教授	歯学博士
評議員	荒川 浩久	神奈川歯科大学大学院 特任教授	歯学博士
評議員	糸田 昌隆	大阪歯科大学 教授	歯学博士
評議員	小笠原 俊史	ライオン株式会社 CSV 推進部 部長	
評議員	河上 修	ライオン株式会社 事業開発部 部長	
評議員	川口 陽子	東京医科歯科大学大学院 教授	歯学博士
評議員	川端 康嗣	ライオン歯科材株式会社 代表取締役社長	
評議員	川本 強	一般社団法人 日本学校歯科医会 会長	歯学博士
評議員	菊谷 武	日本歯科大学 教授 口腔リハビリテーション多摩クリニック院長	博士(歯学)
評議員	佐藤 秀一	日本大学 歯学部 教授	博士(歯学)
評議員	嶋崎 義浩	愛知学院大学 歯学部 教授	博士(歯学)
評議員	新開 省二	東京都健康長寿医療センター 研究部 副所長	医学博士
評議員	高野 秀夫	東京商工会議所 常任参与	
評議員	花田 信弘	鶴見大学 歯学部 教授	歯学博士
評議員	平田 創一郎	学校法人東京歯科大学 教授	博士(歯学)
評議員	福田 洋	順天堂大学 医学部 総合診療科 先任准教授	医学博士(公衆衛生学)
評議員	満武 純	ライオン株式会社 H&H 事業本部 ヘルス&ホームケア事業部 副本部長	
評議員	三宅 達郎	大阪歯科大学 教授	歯学博士
評議員	柳沢 幸江	和洋女子大学 家政学群 教授	博士(栄養学)

理事 (任期：平成30年6月20日～令和2年定時評議員会終結時)

理事 13名

役職	氏名		
代表理事 理事長	藤重 貞慶	ライオン株式会社 相談役 公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所 理事長	
代表理事 副理事長	山本 高司	公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所 副理事長	
業務執行理事	新井 竜次	公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所 業務執行理事 統括部長	
業務執行理事	石井 孝典	公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所 業務執行理事	
理事	天野 敦雄	大阪大学大学院 歯学研究科 研究科長 大阪大学 歯学部 歯学部長	歯学博士
理事	石井 拓男	学校法人東京歯科大学 常務理事・主事 東京歯科大学短期大学 学長	歯学博士
理事	井出 吉信	学校法人東京歯科大学 理事長 学長	歯学博士
理事	川添 堯彬	大阪歯科大学 理事長 学長	歯学博士
理事	島川 智行	株式会社扶桑社 常務取締役	
理事	高野 直久	公益社団法人 日本歯科医師会 常務理事	歯学博士
理事	田上 順次	東京医科歯科大学 理事・副学長 東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 教授	歯学博士
理事	服部 正巳	愛知学院大学 歯学部 特任教授	歯学博士
理事	安井 利一	明海大学 学長	歯学博士

監事 (任期：平成30年6月20日～令和2年定時評議員会終結時)

監事 3名

役職	氏名		
監事	上林 博	上林法律事務所	弁護士
監事	木村 直人	木村直人税理士事務所	税理士
監事	西山 潤子	ライオン株式会社 監査役	

公益財団法人ライオン歯科衛生研究所のあゆみ

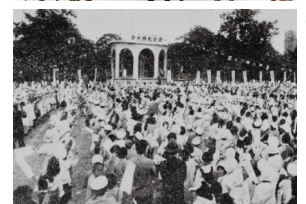
- 1913年 ○ 口腔衛生啓発活動開始(写真①)
- 1921年 ○ 「ライオン児童歯科院」開設(写真②)
- 1932年 ○ 「第1回学童歯磨教練体育大会」(現:全国小学生歯みがき大会)開催(写真③)
- 1952年 ○ 口腔衛生普及車「ライオン・ヘルスカー1号」完成(写真④)
- 1958年 ○ 母子歯科保健活動(たんぼぼ運動)開始
- 1961年 ○ 就業者への歯科保健活動(さくらんぼ運動)開始
- 1964年 ○ 「財団法人ライオン歯科衛生研究所」設立
「ライオンファミリー歯科診療所」開設(東京・京王デパート)
- 1965年 ○ 学童歯みがき大会をオリンピック競技場(国立競技場)で開催(写真⑤)
- 1984年 ○ 台湾の園・小学校で歯科保健活動実施(写真⑥)
- 1992年 ○ ライオン New Year セミナー(現:ライオン健康セミナー)開始
- 1998年 ○ マレーシアでの口腔保健活動実施
- 2004年 ○ 設立40周年記念として「歯周病と全身の健康を考える」を発行
- 2005年 ○ 視覚障害者向け歯の健康冊子「さわってわかる歯みがきの本」監修
- 2007年 ○ ホームページ開設、季刊誌「お口の時間」発行
- 2009年 ○ 学童歯みがき大会のインターネット配信をスタート
- 2010年 ○ 公益財団法人として内閣府より移行認定
- 2014年 ○ 目黒駅前歯科診療所を東京デンタルクリニックとして五反田に移転・開院(写真⑦)
「口腔機能への気づきと支援ーライフステージごとの機能を守り育てるー」を発刊
- 2015年 ○ 「健康をみがく笑顔をふやす」シリーズ全4巻発行
- 2016年 ○ LDH国際シンポジウム[健康寿命の延伸に向けた歯科医療の使命と可能性]を開催(写真⑧)
- 2017年 ○ 「歯みがき100年物語」発行
- 2018年 ○ 第75回全国小学生歯みがき大会を開催。約21万人がDVDで参加(写真⑨)



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



公益財団法人 **ライオン** 歯科衛生研究所

<https://www.lion-dent-health.or.jp/>

東京本部

〒130-8644
東京都墨田区本所1-3-7
TEL.03-3626-6490
FAX.03-3626-4182

名古屋事業所

〒460-0003
名古屋市中区錦2-3-4
名古屋錦フロントタワー10階
TEL.052-220-6780

大阪事業所

〒541-0057
大阪市中央区北久宝寺町3-6-1
本町南ガーデンシティ6階
TEL.06-7739-8422

東京デンタルクリニック

〒141-0002
東京都品川区東五反田5-23-7
五反田不二越ビル2階
TEL.03-3473-6721
<https://dentalclinic.lion-dent-health.or.jp/>